



名古屋柳城短期大学

ちゃべるにゅーす

第20号

2011年7月20日

キリスト教センターの新設

はじめに、4月1日、本学にキリスト教センターが新設されたことを報告します。そのねらいは、「愛をもって仕えよ」という本学の「建学の精神」がこれまで以上に私たちの中に浸透し、学内での学習や生活の中でより着実に実現されることです。聖書を学んだり、聖歌を歌ったり、キリスト教に関する研究フォーラムを開催したり、ボランティア活動のガイドをするなど、さまざまな活動が予定されています。

これらの活動を
一挙にスタート
することは難し

いと思いますが、できることからひとつひとつ着実に取り組んでいきたいと考えています。キリスト教センターの活動をとおして本学での学びがいっそう広がり、豊かになるものと確信していますので、ぜひ多くのみなさんの参加を期待しています。

第3世界のために働くユネスコ

さて本題に入ります。世界大戦（第1次も第2次も）は無残にも人類史上最も罪のない多くの人々の命を奪っただけではなく、先人の残した貴重な文化財や掛けがえのない自然

環境を破壊してしまいました。第2次大戦直後、このことを猛省し、戦争の悲劇を二度とくりかえさないように、「人の心の中に平和の砦を築く」（ユネスコ憲章）ことをめざしてユネスコ（UNESCO国連教育科学文化機関）が発足し、教育や科学や文化を世界中に普及するために、世界文化・歴史・自然遺産の保存に、また貧しい国々（第三世界、すなわちアジア、アフリカ、ラテンアメリカの開発途上国）での学校づくり（「寺子屋運動」）に大きな役割を果たしてきました。

学びをとおして人生と社会の役に

学長 新海 英行

宇宙開発競争が
激化する現代では
ありますが、その
一方で貧困や戦争

のため成人人口（15歳以上）の25%が学校に行けず、文字が読めません。パキスタン、バングラディッシュ、アフガニスタン等では、とくに女性の過半数が非識字者です。ナイジェリアやモザンビークでは字が読めないためエイズの感染から身を守ることができないまま今に至っています。

学びの権利宣言

こんな悲惨な実態を克服するために、ユネスコは、「教育をすべての人々に」という合言葉のもと、「どんなに貧しくても、だれも

が学校に行け、だれもが学べる世界にしよう」と呼びかけ、1985年に「学びの権利宣言」を世界にむかって発信しました。この宣言は、かなりの意識をしていますが、つぎのように述べています。

「学びとは、まずは読み書きできるようになることです。読み書きできるようになれば、自ら問いを發し、ものごとを深く考え、分析することができるようになり、さらに見聞きできないものを想像し、新しい考えを創造する力が育ち、その結果、自分自身の世界を読みとり、歴史をつづることができるようになる、このような学びは人として生きるための万人に保障されるべき権利です」ほんとうの学びは、私たちに自分たちの生き方をも吟味させ、さらに人生や社会を切り拓く力を与えてくれるものとされています。そして、こうした学びは、何よりも「私たちを、なりゆきまかせの脇役（客体）から、自分の人生の主役（主体）に変えていくもの」にほかならないのです。

その背後にキリスト教信仰

実はこの宣言の背景には、20世紀後半における世界的な識字教育運動の思想的・実践的指導者、パウロ・フレイレ（Paulo Freire 1921～1997）の「解放の神学」に依拠するキリスト教信仰が存在していたことが見逃せません。かつてローマ帝国時代の教会は民衆を強力に支配し、中世の教会も民衆の上に君臨しました。しかし解放の神学は、貧しい者、差別される者、支配される者、抑圧される者の側に立ち、かれらの立場からの聖書をとらえ直し、かれらの解放をめざして社会的な実践が取り組まれました。サンパウロやマニラの路上で車のフロントガラス拭きや新聞売りや売春で

一家の生活費を稼ぐ子どもたちや繰り返す失業で生きる意欲を失ったおとなたちを対象に行われてきた識字教育運動もそうした実践の一つといえましょう。

ところでフレイレは第三世界の人々だけに識字教育を行おうとしたのでしょうか。そうではないと思います。識字率100%近い第一世界（先進工業国）の私たちに対しても、貧困、差別、支配、抑圧から解放され、人生や社会の主役として成長するための、ほんとうの学びのあり方を求めてやまなかつたのです。ぜひみなさんも、ほんものの学びにとりくみ、自分の中に潜むさまざまな可能性を見つけ、引き出し、それに磨きをかけ、自分を時代や社会の中に位置づけてとらえ、自己成長し、なかまとも相互成長することによって、みなさん自身の人生の主役に、そして社会の主役に大成していただくことを願っています。

末筆で失礼ながら、東日本の大地震・大津波で亡くなられたみなさまに心から哀悼の意を表し、また災害と原発事故により不安と恐怖に苛まれているみなさまに一日も早く復興への希望のともし火が灯ることを、ともに祈りましょう。

（本稿は、6月1日、2年生の学生礼拝での教話です。）



あなたは神を信じますか

新チャプレン 田中 誠



「ちょっといいですか、あなたは今、神を信じていますか？」

ずいぶん昔にテレビの番組で、このように話し

かけて知らない人に外国人がインタビューする番組があったような気がします。しかし、今改めて皆さんがこのように聞かれたら、どのように答えるでしょうか？多くの人にとって戸惑うことであるに違いありません。普段全く意識してないことだからです。

私自身について言えば、学生時代は、自分がキリスト教信者の家に生まれたにも関わらず信じているという確信がもてない、むしろ信じられない、という気持ちがあつて悩んでいました。そこで出した結論は、「何事によらず自分で考えて解決していける間は悩まないで自分の考えでやっつけよう。神様と出会うならば自然にそういう時が来るだろう。」というものでした。実際のところ20代の前半はこれといって悩むこともなく過ぎました。しかし、年齢を重ねると共に自分一人では解決できないことや、いろいろな壁におつかつて、次第に宗教について考えるようになりました。それは最初からキリスト教に限定されていたわけではなく仏教や哲学の本も読みました。

「神様といつ出会うか」それは、人によって様々でしょう。例えば今回の地震を経験した人にとっては、「神様がいるなら救ってほしい」と考えるか「神様なんか絶対にいない」と思うか、どちらかの気持ちに強く引張られると思います。しかし、実際には、それほど

簡単には決められません。

例えば人間が考えるようなことをしてくれる神様なら、世の中に嘘を言ったり、悪いことをしたりする人は全くいないはずですが、しかし、自分が今まで全く悪いことをしたことがないかという、それもまた無理があります。つまりそんなに簡単には決められないのです。

神様は、人間が必要とするときに「なんで神様は応えてくれないのか？」「こんなに不条理なことがあつていいのか？」という思いを多くの人にさせます。では、本当に全く神様はいないのか？そうとも言い切れないのもまた現実です。キリスト教が2000年も絶えることなく続いてきたこと、今日でも多くの信者がいることを考えても「いない」と言い切るには難しさがあります。

では、どういうところで神を感じるのでしょうか。人は、人生の上で様々な困難に出会ったり、悩んだりすることがあります。そうした経験をする中で祈り耐える日々を過ごすことでやがて、一つ一つを切り抜けていきます。そして後で振り返ってみると「自分の力だけでは切り抜けられないことだった」ということで神の支えを感じるということがあつたのだと思います。なんで神様は応えてくれないのか？多くの人にとっては、日々の悩みからは簡単には抜け出せません。しかし、神の存在を忘れないことが大切だと思います。



合同礼拝報告

賛美のよろこびをともに ～主に向かって、よろこびの声をあげよう！～
「主を賛美するために民は創造された」詩篇102：19 新共同訳聖書

6月15日（水） 13：00～14：30

講師 高浪 晋一先生 ピアノ伴奏 小口 浩司先生



快晴に恵まれた爽やかな一日、学生・教職員450余名の賛美の歌声が体育館一杯に響き渡りました。講師の高浪先生は、『音楽は、神さまを賛美するためにあり、私たちは神さまを賛美するためにつくられました。』と謳われ、人間は、声によって神さまとコミュニケーションできるように創られた存在であると語られました。賛美することは、声を通して私たちが息を分かち合っていることであり、1人より、2人。2人より、10人とたくさんの声を合わせることによって、何倍にも賛美の喜びが大きなものになることを実証してくださいました。参加した学生たちの声を聞いてみましょう！！

高浪先生の楽しくて笑顔になる歌声は、聞いていても一緒に歌っていてもうきうきしました。大勢で合唱することは久しぶりだったので、思いきり歌うことの楽しさが気持ちよかったです。体育館中に響き渡る声にあこがれました。私も練習を重ねて今より大きな声を出せるようになり、子どもを楽しませる音楽を提供できる保育者にな

りたいです。余韻に残る時間でした。(N.I)

私は、今まで礼拝の時間に、こんなに気持ちよく讃美歌を歌ったことがありませんでした。先生方のご指導のもと、柳城にいる全ての人の声がひとつになり、讃美歌の持つ素晴らしさをこの時間に知ることができました。歌うことで、神さまと会話することができるとの話しを聞き、その尊さに、歌の力により、人々はこの世界存在するのではないかと感じました。(U.T)



最初歌うまでは不安でしたが、高浪先生の楽しそうな歌い方に気づいたら、夢中で讃美歌を歌っている自分がいました。歌を歌うことは楽しいこと、神さまとの対話を楽しむことであるということを、この礼拝を通して教わりました。自分が楽しむことが音楽の一步だということを改めて感じました。これからの礼拝の楽しみのひとつとしていきたいです。素晴らしい時間をありがとうございました。(K.I)

歌の講義なんて受けたことがなかったの

ですごく楽しみにしていました。高浪先生の通る声に感動しました。歌った讃美歌も全て良い曲で伴奏を含め覚えたいなと思いました。ハレルヤをステップ踏みながら、手をつなぎながら大きな声で歌うのは、とても気持ちよくて、楽しかったです。小口先生のピアノにも感動しました。歌は、楽譜を目で追うのではなく、前を見て歌うことで歌をもっと楽しめることが分かりました。(U.M)



私は、最前列で合同礼拝を受けました。いつもの礼拝では、聖歌を歌う時、こんな風かな？と曖昧な歌い方をしていたのですが、高浪先生のユニークな教え方で、とても楽しく歌うことができ嬉しかったです。大きな声を出すことは、とても心も体もスッキリとし気分が良くなりました。聖歌を上手に歌う歌い方を学んだとともに楽し

く歌う歌い方を学びました。貴重な体験ができとても良かったです。また、このような機会があったら嬉しいです。(K.S)

高浪晋一先生は、堅苦しくなく明るくて元気で気さくなおじちゃん先生だなと思いました。聖歌の歌い方を教えてくださる時も、すごく楽しそうに教えてくださり、いつもは静かに歌ってしまう聖歌を明るく歌うことができました。ピアノを弾いてくださった小口浩司先生は、優しい弾き方で、ずっと聞いていたい気持ちになりました。素敵な方でした。90分があったと言う間に感じるくらいすごく楽しい時間でした。

(M.Y)



〈講師紹介〉

合同礼拝の講師は、高浪晋一先生、ピアノ伴奏は、小口浩司先生でした。

高浪先生は、讃美歌作曲者であり、合唱指揮、聖歌隊指導など幅広くご活躍です。

長年、玉川学園、国立音楽大学で教えておられました。

小口先生は、現在、指揮者であり、玉川学園大学芸術学部にも所属。私たちの大学と同じ聖公会の立教大学でも教えておられ、高浪先生とは師弟関係でいらっしゃいます。美しい音色の息の合った伴奏で魅了してくださいました。

(文責：尾上 明子、写真：宮嶋 英一)

今、わたしたちにできること

～東日本大震災支援に向けて～

3月11日に東北地方を中心に東日本を襲った大震災。まずはその震災において、いのちを失った方々のことを覚えるとともに、家族をはじめ近親者や友人や知人などを失いながら、今なお被災生活を送っておられる多くの方々に、一日もはやく慰めと平安がおとずれることを心より願っている。

さて私たち柳城は、震災直後からささやかながら義援金活動を始めたり、聖公会中部教区センターの物資支援活動に協力したりする形で、学生に呼びかけするなどして、自分たちにできることを模索してきた。

ただ、実際に現地に足を運ぶという活動については、その重要性を痛感しながらも、新しい年度が動きだし、原発などの新たな問題が加わったために、大学として行うということについては控えていたところがあった。

そのような中で、私たちの学生の中にこの5月の連休を使って、実際に宮城県に行ってボランティア活動を行う者がいた。介護福祉専攻の学生、武田典子さんである。幸い、6月22日の礼拝の時間に、その貴重な体験を聞く機会を得た。私たちは彼女の話聞きながら、その働きに対して敬意を持つと共に、改めて自分たちにできることは何か、というこ



チャペルで話をする武田さん

とを模索し続けることの大切さを確認することになった。(菊地伸二記)

東北地方太平洋沖地震活動報告

介護福祉専攻 武田 典子

(6月22日礼拝から)

私はゴールデンウィークの5月3日から5日にかけて宮城県南三陸町へ行きました。片道12時間ほどかけ途中で休憩を入れながら向かいました。宮城県に入ると高速道路がデコボコしていて、直したであろう跡がたくさんありました。そして、古い家が倒れていたり電信柱が曲がっていたり、言葉では表せない気持ちになりました。しかしそこはまだまだ被害が少ない地域で、山を抜けて南三陸町に入った瞬間に景色が変わりました。テレビで見たことはありましたが、実際に行ってみると同じ日本とは思えないくらい見たことのない景色が続いたからです。地震が起きてから一ヶ月以上たっても見渡すかぎり瓦礫の山が続いていました。また、テレビではボランティアが多いと聞いていたけれど私が着いたときには自衛隊の車がほとんどで一般の方はいませんでした。まず最初に現地の方に避難場所になっていた高台の場所でお話を聞かせて頂きました。その方がまず教えてくれたのは今立っている場所も地震の当日津波がきたとのことでした。そこは30m近くあがっていた場所で保育園もあり、正直反応に困り言葉が出ませんでした。でも他の場所はとてもキレイで、聞いてみると一ヶ月かけてこの場所だけはキレイにしたそうです。そして今は唯一子どもたちが元気に走り回れる場所になりました。しかし、高台から下をみると煙がでていて、救急車の音もなりやむことはありませんでした。その中で午前中行なったことはまずその高台をキレイにするために、木の間の草をかきだしたり、たんぼぼを刈ったり

してほしいということでした。正直、そんなことでいいのかな、などと思ってしまいましたが心の安らげる場所を作ることも本当に大切だと実感しました。そして、休憩をいれて午後の活動にのぞみました。休憩では地元の方が豚汁とお菓子を差し入れてくださって話を聞いたりしながらみんなで食べました。また、午後は老人ホームの瓦礫の撤去をしました。そこはよくテレビにも出ていた場所で20人以上の方が亡くなった場所でもありました。少し高台になっていたのですが、玄関や壁などガラスは全部割れていて、フローリングの床も外まで流されていました。片付けをする中で写真やぬいぐるみが出て来たりして、名札や教科書もあり、物の一つひとつに一人ひとりの思い出があったんだろう、この人たちはどうなってしまったんだろうと考えると、とても心が痛みました。そして瓦礫は頑張って運んでもまわりを見渡すとまだまだ沢山の瓦礫があり、その中で私たちの出来ることは本当に少ししかないと感じました。しかし瓦礫の撤去などを進めないと復興は出来ないし、今後もたくさんの人の協力が必要だと改めて思いました。テレビを見る限り今はボランティア不足で瓦礫も全部片付けるにはまだまだ時間が必要で、今後も行くことができたら行きたいと思うし、できる範囲で応援していきたいです。

また話は変わりますが私の祖母が宮城県に住んでいて、来る途中で近くを通り、前から

気がかりだったのでそのことを上の方に話すと帰りにみんなでいこうと提案して下さいました。そして、10年ぶりに会うことができるととても喜んでくれたし私も会うことが出来るととても感謝の気持ちでいっぱいでした。立ち寄ったことは母親には土産話にしようと思っていたのですが、その日の夜母親からメールが入り、「今おばあちゃんから連絡が入り嬉しかった。本当元気でいい子に育ってくれて自慢の孫だ」と言っていたそうです。正直嬉しかったけれど、山を越えたところで生死が分かれてしまったとのこと、複雑な思いになりました。

被災者の方のことを思うと家族が亡くなってしまった方もたくさんいる中で、家族がいて学校に来てみんなと楽しく勉強していることは当たり前ではなく、幸せなことだと分かりました。そして今回のような経験はなかなかできるものではないし、この経験を活かし自分自身が成長していけるといいなと感じました。

最後に、今回の経験や介護を勉強するようになって今まで以上に老人の方やそれ以外の方の気持ちを考えるようになりました。そして、なによりも、笑顔でいることは人の心を助けるものになり、とても大切だと感じました。これからは辛いことがあっても笑顔でいられるよう心がけたいし、みなさんも笑顔を忘れないように過ごしてください。



新任教職員自己紹介

新任の教職員方をそっくりな似顔絵と共に紹介します。似顔絵は保育科2年Dクラス堀場脩司さんに描いていただきました。

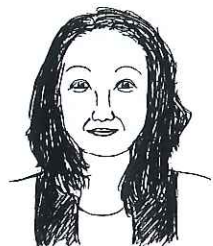
田中 誠 チャプレン



週に一度礼拝の時にお目にかかるだけというのがほとんどの人にとっての私の存在ということになるのかも知れませんが、普段はどこにいるのかというと、向い名古屋聖マタイ教会にいます。

教会では、日曜日以外でも礼拝があったり、信徒さんのお宅を訪ねたり、と色々な仕事があります。特にマタイ教会は、信徒さんが200人ぐらいいるので様子を把握するのは大変です。もう一つは総主事という仕事で20以上ある教会の信徒さん全体にかかわることをしているのです。でも、大体は教会にいますので、何か相談したい時、また見かけた時は気軽に声をかけてください。

櫛木 真理子 教務課員



4月から教務課でお世話になっていきます櫛木です。自分もミッション系の学校の出身ですが、行事の時に聖歌をうたう学生はほとんどいませんでした。残念ながら、建学の精神も知らずに卒業していく学生も少なくなかったと思います。そのため、柳城に来てすぐに参加した学外合同ゼミで、柳城生が大きな声で聖歌をうたい、一生懸命に祈りを唱える姿を目にしてとても感動しました。毎週の礼拝をとおしてキリスト教育に自然に触れることができる環境と、それを素直な心で受け止める学生の気質がうまく調和して培われてきた伝統ある柳城の素晴らしさだと思います。この歴史がこの先も永く続いていく事を願います。



松本 勝 法人事務局員



前の職場はキリスト教青年会というところでした。英語で言うとYMCA (Young Men's Christian Association) です。キリスト者に限らず青年層に対する啓蒙および生活改善事業のための奉仕組織として、教派を異にする12名のクリスチャン青年によって1844年にイギリス・ロンドンで創立されました。活動理念の根幹にキリスト教精神を据えています。ボランティアやプログラム参加者にキリスト教信仰を強いてはいません。組織の基礎がキリスト教にあり、世俗と教会の間に立つという意味では柳城も同じかもしれません。一般には教会はそれなりに敷居の高い所のようなのですが、ここには身近に教会や礼拝があります。教会や神様を少しでも身近な存在に感じてもらえたら良いなと願いながら働いています。

早川 美智代 教学部員



3月まで附属柳城幼稚園に勤務しておりましたので、毎日子ども達と礼拝をしていました。2歳の子でも家でおやつをいただくときなどに、「お祈りをしてからだよ」とお母さんに注意するそうです。先日合同礼拝に出席して、懐かしいような、また新鮮な感じさえする楽しい雰囲気を楽しむことができました。学生の頃は、礼拝の前にこっそり自分のわがままなお願いをしていたのを思い出します。今は日々生かされていることに感謝するとともに、神様はいつも一緒にいてくださって、迷ったときや悩んだときは必ず導いてくださると信じております。なかなか学生の皆さんと話す機会もなくて寂しく思っていますので、先輩ということで気軽に声を掛けていただけたら嬉しく思います。

2011年7月20日発行 第20号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。